

『新建設』から見た台湾紙芝居史

邱 昱 翔

QIU Yuxiang

大阪市立大学文学研究科 博士後期課程

はじめに

神奈川県立非文字資料研究センター「戦時下日本の大衆メディア」研究班は2014-16年の3年間、所蔵している「国策紙芝居」を中心に、日本国内における諸活動のみならず、植民地や占領地での事象をも対象とし、メディアとしての「国策紙芝居」の歴史的位置を考察した。その成果が、2018年に上梓された『国策紙芝居からみる日本の戦争』である。当書所収の、新垣夢乃著「植民地台湾の紙芝居活動についての記録と記憶——植民地紙芝居研究の射程」⁽¹⁾は、研究班によって行われた現地調査と聞き書きに基づいている。この論文は、植民地台湾の紙芝居活動に関して、初めて網羅的に考察した先駆的な論文であり、「植民地台湾に存在した紙芝居作品」と「植民地台湾の各種団体による紙芝居活動年表」など、今後の研究の指標となり得る内容も含んでいる。しかし、当論文は1944-45年間の参照資料を欠いている。また、紙芝居と台湾の伝統芸能との関係についての言及も不足している。筆者は、台湾紙芝居協会の上部機関である皇民奉公会の宣伝機関誌『新建設』にその資料が求められると指摘したい。本論は、まず『新建設』中の台湾紙芝居関係資料を考察し、特に松居桃楼の畫劇脚本『水仙郷』について論述する。そして、紙芝居と台湾伝統芸能である「講古」と「講善書」との関係を考察し、植民地台湾の紙芝居研究における空白を補いたいと期する。

I 植民地台湾紙芝居研究における『新建設』の重要性

(1) 皇民奉公会の宣伝機関誌『新建設』

1937年9月、日中戦争勃発後、第一次近衛内閣によって、国民を戦争に協力させるための政策として「国民精神総動員」が提起された。台湾では、総督府により、国民精神総動員本部が設置された。その後、日本において新体制運動が始まり、1940年10月に大政翼賛会が成立した。1941年4月、台湾における新体制運動を担う組織として皇民奉公会が発足した。総裁は台湾総督が任じ、会務総括機関たる中央本部長には台湾総督府総務長官（台湾総督の施政を補佐するとともに、台湾総督府の各政策の実務を担当した）が就任し、これとともに、旧来の国民精神総動員本部は解散した。⁽²⁾

1942年8月の皇民奉公会の機能刷新は、宣伝部の事業にも及び、皇民奉公運動を推進するための宣伝機関月刊誌『新建設』が同年10月に創刊されることとなった。⁽³⁾1945年4月発行の「3・4月合併号」まで全29号の刊行が確認されているが、第1巻第3号⁽⁴⁾（1942年12月？）は未だに発見されていない。

(2) 皇民奉公会と台湾紙芝居協会との関係

1941年9月、「最近紙芝居は其の演出の簡易平明なると運営経費の低廉なる點に於て、低文化政策の寵兒として、普く大衆に親しまれ教化宣傳機關として、將又國民健全娛樂として、利用せらるべき價值大なるものあるに鑑み、本島の特殊事情に立脚せる臺灣紙芝居協會を設立し、當局の指導後援の下に紙芝居の普及發達を圖り、國策宣傳竝に皇民奉公運動の趣旨達成に資

すると共に、島民健全娯樂の一翼に寄與せしめんとす⁽⁵⁾との趣旨で、皇民奉公会の内部に台湾紙芝居協会が設立された。皇民奉公会中央本部事務総長は会長に、台湾総督府情報部副部長と台湾総督府文教局長は顧問に、皇民奉公会宣伝部長は常任理事に、それぞれ就任した⁽⁶⁾。このように皇民奉公会と台湾紙芝居協会は密接に関係していたため、植民地台湾紙芝居研究において皇民奉公会の宣伝機関誌『新建設』は参照するべき資料であるといえる。

(3) 『新建設』中の台湾紙芝居関係資料

『新建設』中に台湾紙芝居関係資料は表のごとく見いだすことができる。

その中に新垣論文を補足できる領域が二つある。一つは新垣論文中の資料1:「植民地台湾に存在した紙芝居作品」において言及されていない作品であり、次のようなものである。『鬪ふ母』、『妻』(大日本婦人会監修、日本教育紙芝居協会発行)。健兵指導紙芝居『赤トンボ』、『空晴れて』(台湾紙芝居協会発行)。郷里の青年団に見送られて入営したばかりの山田三吉□(原文空白)等兵の朗らかな兵隊物語『兵隊の一日』(台湾青少年団並芸能奉公会推薦、台湾紙芝居協会発行)。家庭防空周知のための紙芝居『敵機何ものぞ』、義報隊周知のための紙芝居『水仙郷』(台湾紙芝居協会発行)。なお、これらの作品のうち『水仙郷』の畫劇脚本以外は、現物が見つからない。

もう一つは、新垣論文中の資料2:「植民地台湾の各種団体による紙芝居活動年表」が欠いている活動またはその実況である。この年表では第一回、第二回全島畫劇競演会に関して言及されているが、ここで示されている参考資料⁽⁷⁾は、受賞者、代表地域、演目のみを記した文献である。これを補う資料として、山口正明による「全島畫劇競演会評宣傳戦の新兵器——戦ふ紙芝居——」という記事とそこに掲載された写真が挙げられる。これは競演会の実況を考察するに際して、貴重な文献であるといえる。

新垣夢乃「山口正明の紙芝居教育について——教育における「感激」の戦中と戦後⁽⁸⁾」によると、山口正明は以下のような経歴である。1913年頃の生まれと推測される。1931年に台南師範学校を卒業。同年、台

南の末広公学校⁽⁹⁾(現在の台南市進学国民小学)の教員となる。敗戦後、1948-52年には山口県の湯田小学校において教諭、1953-55年には神原中学校において教組文化局長組合専従、1956-1961年には西岐波中学校において教諭、1962-61年には東岐波中学校において教頭、1966-69年には篠目小学校において校長として勤務している。没年は不明である。

山口は1938年に日本教育紙芝居協会の東京での発会式に参加している。また、同協会の機関誌『教育紙芝居』に台湾の紙芝居活動について投稿している。台湾初期の紙芝居活動を支えた人物の一人である⁽¹⁰⁾。第一回全島畫劇競演会について、彼は次のように述べた。

一等『櫛』を演出した高雄州の莊氏桂月嬢、この人は旗山郡の國民学校の衛生婦であるが、とにかくあの日本の母としての尊い精神を深く描いたあの作品をよくもこなし得たと感心している。演出は決して派手なものではなく、素直な朗讀法の中に切々表現して行った腕の深さは敬服に値する。(中略)二等は臺北州『太郎熊、次郎熊』の村上京子嬢である。一高女の卒業生だがこの人の言葉の美しさは当日の随一と言ってよい。しかも臺詞一つ一つが金の滴の様に光っていた。目立たない間を使って観衆の眼を畫面に吸ひつけて離さない魅力は、一寸真似の出来ない境地である。(中略)同じく二等は『大空の子』臺南州の黒江仲子嬢。(中略)作品の表現が深い場合、音楽伴奏によって却って焦點が外れる場合がある。(中略)三等は『海の母』臺中州の田川文雄氏であるが、幅の廣い力強い演出は観衆に喰ひ込んでしばしば嘆息を吐かせた程である。(中略)音楽の選擇のよさが目立っていたが蓄音機の操作に多少體の動くのは惜しい點である。同じ三等臺南州の涂而安氏の『軍神の母』(中略)演出が力強かったために倦きることなく最後まで眼がはなせなかった。聲色が下品に墮する程でもなく危い所でおさへていたが、難は音楽伴奏が通俗的である。(下略)

一方、年表に収録されていない第三回全島畫劇競演会は、吉村敏による「第三回 畫劇競演会寸評」とい

通巻	出版年月日	掲載頁	標題	備考
創刊号	1942/10/15	33	臺灣の紙芝居	(紙芝居協会による報知)
第2号	1942/11/13	35	『鬼征伐』	(今後刊行する作品の紹介) 畫：宮田晴光
第6号	1943/03/03	33	臺北市奉公壯年團 二月十一日紀元節當日	(写真あり)
		38-41	『敵だ！倒すぞ米英を』	「誌上紙芝居 大政翼賛会宣傳部作 近藤日出造畫」
第7号	1943/04/01	27	護國の英靈に献ぐ	(写真あり) 「臺北市畫劇挺身隊員は三月十日陸軍紀念日當日、 護國神社境内に於いて紙芝居を献納、參詣の遺族達 を慰問した」
		52	宣傳部	「巡回畫劇實施」
第8号	1943/05/08	表紙裏	記念常会	(写真あり) 「臺北市末広町第五分区、第二十一、二十二、二十三、 二十四奉公班合同記念常会に於ける岡山悦子さ んの紙芝居實演」
第11号	1943/08/01	29	紙芝居紹介 婦人会監修	(紙芝居販売の知らせ) 『闘ふ母』『妻』
第12号	1943/09/01	59	紙芝居	(紙芝居協会による報知) 臺北州防諜聯盟懸賞 募集一、二等作品 『躍る魔手』『〇〇鋌山の出來事』
		62	全島畫劇競演會評 宣傳戦の新 兵器——戦ふ紙芝居——	著者：山口正明
第13号	1943/10/01	39	紙芝居協会	(紙芝居協会による報知) 防諜紙芝居『躍る魔手』『〇〇鋌山の出來事』 報道畫劇第十七輯 『豚と隣組』
第14号	1943/11/01	46	徴兵制實施紀念紙芝居脚本募集	
		48	紙芝居協会	(紙芝居協会による報知) 製作中の紙芝居 『希望の大空』『曙の母』『握る一塊』『足跡』
第15号	1943/12/01	50	紙芝居協会	(紙芝居協会による報知) 製作中の紙芝居 増産紙芝居 『山の香り』 貯蓄増強紙芝居 『常在戰場』
第20号	1944/05/01	34	榮ある奉公賞	「團體賞ノ部：畫劇挺身隊 臺北州臺北市畫劇挺身 隊」
第21号	1944/06/01	51	全島民總蹶起運動 宣傳啓發實施要綱	「七、其他の實施方案 畫劇及演劇の表演」
第22号	1944/07/01	47	紙芝居新刊豫告	『赤トンボ』 健兵指導紙芝居 原作：碇政彌 畫：石原紫山 『空晴れて』 健兵指導紙芝居 原作：中山チエ 畫：野村泉月
第23号	1944/08/01	13	紙芝居新刊紹介	臺灣青少年團竝 藝能奉公團推薦 『兵隊の一日』
第25号	1944/10/01	41	第三回 畫劇競演會寸評	著者：吉村敏
第26号	1944/11/20	48-50	畫劇脚本『水仙郷』	著者：松居桃樓
第27号	1945/01/01	47	紙芝居新刊紹介	家庭防空紙芝居 『敵機何ものぞ』 原作：鶴丸詩光 畫：石原紫山 義報隊周知用紙芝居 『水仙郷』 原作：松居桃樓 畫：石原紫山

う記事により、その開催が確認できる。第一回全島畫劇競演会の開催日は1942年8月1日、第二回全島畫劇競演会の開催日は1943年8月7日である。この記事に掲載した『新建設』通巻第25号は9月27日印刷、10月1日発行であるので、第三回全島畫劇競演会も8月に開催された可能性が高い。吉村については、先行研究によると、昭和15年前後までは台南に居住して鄭成功の研究をしていたこと、その後台北放送局に入り文芸部で中山侑や名和栄一と同僚であったことが知られる程度である⁽¹¹⁾。

しかし、筆者は国立台湾図書館のデータベースを通し、新しい資料を見つけた。吉村は1933-42年間、何回か『台湾教育』に投稿していた。その中で1934年⁽¹²⁾12月に刊行した文章には、所属先を「台南州東石郡蒜頭公学校」（現在の嘉義県蒜頭国民小学）と記していた。1935年10月から1937年2月に刊行された文章には、所属先は「朴小」⁽¹³⁾（台南州朴子公学校、現在の嘉義県朴子国民小学と思われる）と記していた。したがって、昭和15（1940）年以前に吉村が公学校の教員を務めていたことが判明する。

彼は山口正明より厳しい立場から、第三回全島畫劇競演会で見た問題点を次のように述べた。

臺灣畫劇運動興振のために次のやうなことを参考として述べなければならぬ。それは、畫劇表演技術の根本的な問題についてである。表演技術を要約すれば、解説に就いての技術と繪の操作についての技術になる。この兩者を兼ね備へるといふことは極めて困難な問題で、一等入選者越智君にして、この點では未だの感が深く、相當基礎的な問題から再出發をしなければならないものがある。（中略）畫劇はあくまで畫劇である。どこまでも繪の尊重を計るべく、機械的に引き抜いてしゃべっていくなら樂なものである。ところが、十三名の代表者中二、三を除いては、繪への考慮が充分拂はれていないと言へるのではないか。（下略）

II 松居桃楼の畫劇脚本『水仙郷』

(1) 台湾演劇協会主事

畫劇脚本『水仙郷』の作者松居桃楼は、当時台湾演劇協会主事を務めていた。台湾演劇協会は、1942年3月に「本会ハ島民ニ健全ナル娛樂ヲ提供シ情操ヲ陶冶シ、進ンデ日本精神ノ昂揚ト皇民奉公運動ノ推進ヲ圖リ、併セテ時局認識ノ透徹ニ努ムル為、演劇ノ改良向上ヲ圖ルヲ以テ目的トス」⁽¹⁵⁾という趣旨で、皇民奉公会の指導によって設立された。これ以後、協会の正会員として認められない職業劇団は解散させられ、脚本も必ず協会の検閲を経なければならなくなった。

邱坤良「戦時在台日本人戯劇家與台湾戯劇——以松居桃楼為例」⁽¹⁶⁾は松居桃楼の台湾在留時代に関しての、初の専門研究である。松居桃楼に対するこれまでの認識不足を補い、同時代の台湾人演劇人と対立する「敵役」⁽¹⁷⁾と見なされる視点を修正した。以下はこの論文にある松居の詳細である。松居桃楼（本名、松居桃多楼）は1910年に生まれた。父は劇作家、演出家、小説家、翻訳家である松居松葉である。1936年早稲田大学政治経済学部に入學。1941年松竹演芸演劇審議会委員を務め、1942年内閣情報局に演劇指導者として選ばれ、渡台した。1946年に日本へ引き揚げ、丹沢開拓地共同組合長を務めた。1950年東京隅田公園廃品回収の業務を行う労働者たちのために、蟻の街を結成した。1953年、北原怜子の事績を記した『蟻の街のマリア』を出版し、本作品は1958年映画化された。1994年没。

(2) 『水仙郷』中の義勇報国隊と漢詩

『水仙郷』のあらすじは次のようなものである。大きな河口に、水仙郷という町があり、人々に慕われている王柏寿はここに住んでいる。水仙郷の対岸石角埔に住んでいる娘林王氏錦秀と婿林泰山は、孫泰和と娘美子を連れ、王柏寿の誕生祝いにきた。義勇報国隊に入隊するかどうか躊躇している林泰山に対し、王柏寿は「率先垂範」と揮毫した。村民吉仔と土仔は一所懸命にご奉公している林泰山を見、皮肉を言ったが、吉仔の息子と土仔の娘もご奉公している。せっかちな村民陳義人は、ご奉公の重要性を吉仔と土仔に説いた。

数か月後のある夜、空襲警報が鳴って、敵は石角埔に焼夷弾を落とした。翌朝、空襲警報が解除された後、王柏寿は石角埔に向かって舟を漕いで、孫たちの安否を確認しに行った。河岸で、吉仔の息子成仔と土仔の娘進貴との会話が聞こえていた。成仔の家は焼け、進貴の弟は怪我を負っていたが、お互いに休むことを勧めて、相手の供出米の運搬を手伝うと申し出た。王柏寿は自分が孫たちのことばかり心配していたことに気付いて、反省した。その時、働く懸命な姿を義勇報国隊に見られ、吉仔と土仔も隊員になった。王柏寿の目には熱い涙が滲み、水仙郷に向かって舟を漕ぎながら、愛好していた愛国の詩を吟じ始めた。

『水仙郷』は典型的な国策作品といえるが、特に分析すべき点が二つある。一つは「義勇報国隊」との関連である。『水仙郷』の脚本は『新建設』通巻第26号に掲載され、第27号に「義報隊周知用紙芝居」として紹介されている。台湾義勇報国隊とは、台湾総督府の要請に基づき、皇民奉公会中央本部により台湾義勇報国隊基本要綱案が作成され、台湾総督府防衛本部の議の上で正式に決定され、皇民奉公会が中心となって結成された組織である。台湾義勇報国隊は「臺灣總督府に於ては八月二十二日臺灣に於ける戦場態勢整備の方針を決定するに當り、この國民の沸き上る熱情に組織と任務とを與へて、全島民鐵石の團結の基礎の上に、臺灣防衛態勢を完成するの必要を認め、國民の義勇組織を編成せしむることに決定した⁽¹⁸⁾」という方針に基づいている。その具体的な目標は五つある。

- ① 民心の指導及流言蜚語の撃碎。
- ② 非常食糧配給への協力。
- ③ 飛行場其の他陣地構築。
- ④ 死傷者の救出及運搬。
- ⑤ 防空及防衛への協力。⁽¹⁹⁾

『水仙郷』は「義報隊周知用紙芝居」として、上の実施目標を描いた。村民陳義人がご奉公の重要性を吉仔と土仔に伝えたのは①であり、供出米の運搬は②である。進貴の弟の怪我が、救護所で処置されたことは④であり、義報隊の隊員たちが警察官の指示に従い、爆撃で破壊された橋梁の応急修理を行ったのは⑤にあ

たる。

もう一つは「漢詩」である。『水仙郷』の中に使われた漢詩は二首あり、書き下し文付きである。一首目は王柏寿が誕生祝いにきた家族を待っているときに吟じた「問余何事栖碧山／笑而不答心自閑／桃花流水杳然去／別有天地非人間（余に問ふ何事ぞ碧山に栖むと笑って答へず／心自ら閑なり桃花流水杳然として去る／別に天地有って人間に非ざるなり）」である。この作品は唐代の李白の『山中問答』であり、隠居の自在を描いている。二首目は王柏寿が水仙郷に戻って舟を漕いだときに吟じた「六博争雄好采（原文ママ、彩と思われる）來／金盤一擲萬人開／丈夫賭命報天子／當斬夷（原文ママ、胡と思われる）頭衣錦回（六博雄を争うて好采（原文ママ、彩と思われる）來り／金盤一擲萬人開く／丈夫命を賭して天子に報ず當に夷（原文ママ、胡と思われる）頭を斬り錦を衣て回るべし）」である。この作品は李白の『送外甥鄭灌從軍三首』の一首目であり、從軍する甥を励ます作品である。賭博で良い結果を出すことを、從軍の機会を得ることになぞらえている。

台湾紙芝居協会によって刊行された作品には、本土で制作されたものと協会側で制作されたものがあつたが、共に台湾語訳が付されていたことは、刮目に値する。これについて、協会側は「これは一見本島の國語普及に相反するかのやうに見えますが、こゝ當分決戦下の超非常時に於いては、國語普及と同時に島民に対して時局の正しい認識を植つけ、皇民奉公の實踐意志を培養することが急務であります。（中略）觀衆の殆んどが國語不解者である場合には止むを得ざる處置として臺灣語による演出を行ふ事も止むを得ません⁽²⁰⁾」と述べている。『水仙郷』の紙芝居はまだ発見されていないため、台湾語訳が確認できない。しかし、漢詩を使った点、高齢で日本語が理解できないと思われる王柏寿を写實的に描いた点が、同じく日本語が理解できない觀衆に配慮した演出であることは想像できる。特に『送外甥鄭灌從軍三首』を使ったことは、唐代と1944年頃の時局を巧みに重ね合わせている。「丈夫命を賭して天子に報ず」の「天子」は「天皇」を指していると見るのが自然だろう。

Ⅲ 紙芝居と「講古」と「講善書」

新垣論文の聞き書きによると、当時の台湾人の児童にとって、人形芝居（布袋戲）は紙芝居より面白かったという。つまり台湾人児童にとって紙芝居は一番の楽しみとはなり得なかったのである。ここで筆者は比較対象として、形式的に紙芝居と似ている台湾伝統芸能の「講古」と「講善書」に着目したい。この二つの伝統芸能について、日本統治時代最初の語学雑誌『台湾土語叢誌』⁽²¹⁾の中に、1900年における貴重な記録が残されている。

○講古

昔々事を話すと云ふことで、取りも直さず内地で演る軍談講釋のことである（中略）彼は縁日の市の片方などに立って講るのだが、此は廟の片隅で椅子に腰掛けて講る（中略）元來講古の人（コンコーエラン）も辻講釋師と同じく、講古を渡世にして居る即ち賣話して居るのであるから、時々は聽人から「拾錢」（キョーチン）せねばならぬ（拾錢とは錢を拾ふの意で、聽人から錢を貰ひ受くるのである）そこで二三分も講古して一條の話が済むと云ふと、そこ、椅子を離れて「拾錢」に回る、此時聽人は懐中デハない、例の子内（トアライ）から一文二文を探り出して給る、講釋せらるゝ書は何様なものであるかと云ふに、先づ三國志、水滸傳、西遊記、などを始として、梨園春、蝴蝶媒、二度梅、好述傳（原文ママ、好述傳と思われる）、萬華樓（原文ママ、万花樓と思われる）などいふのが能く講釋に上るさうである。⁽²²⁾

○講善書

講善書は教化を目的として通俗修身講談を為るのである、固より一の功德として演るのであつて利慾や名譽のためにするのではないから聽衆から金を取ツたりする様のは毫も無い、中には做好事の人（ゾーホースーエラン）同士が金を出し合ツて講善書的人（カンシェンチャーエラン）を請じ、其人に講ツて貰ツて衆人に随意聽聞させるこ

ともある、だが、講善書的人と云ツて（中略）詰り読書人（タクチャーラン）の為る仕事となつて居るのである（中略）講壇（カントアン、又善壇〔シェントアン〕とも云ふ）は廟や宮の内に設けられることもあり又自宅の店先きや門前へ設けられることもあるが、一體修身講談をするのであるから、總べての飾り付から器物の配置など一々気を付けて其相応立派に仕繕うのである（中略）先づ最初に當席講談の題目と大意とを述べ、それから聖賢の格言や教訓的に出來た詩文など引き來りて一々之に俗解を施すのである、さうして終り事實例話を挙げて善惡應報の理を明にすると云ふ按配式に講る、又其講談の口調も經書の講釋をする時とは丸で異ツて、極俗調で講るのであるから無学文盲の先生達にも能く解るのである（中略）多く講ぜらるゝは、太上感應篇、循環鑑、暗室灯、宣講集要、因果錄、覺世新々、それから去年新版⁽²³⁾になつた渡人寶筏などである。

文献によると、「講善書」は大正年間まで続いた⁽²⁴⁾。また「講古」は1920年代演劇が盛んになるとともに、不振となつた。⁽²⁵⁾補足すると、1920年代は中国伝統戯曲が台湾において「本土化」（歌仔戲、客家大戲）し、成熟した時期である。つまり、文盲の台湾人觀衆は何より娯樂性を求めていたことが分かる。

塘翠迂人は1928年3月から7月にかけて「台湾講古私考」と題し、『台湾警察協會雜誌』で5回連載を行った。『台湾警察協會雜誌』は1917年に設立された「台湾警察協會」の機関誌であり、警察、刑務所、裁判所など警務関係者のための協会設立と同時に創刊された総合雑誌である。⁽²⁶⁾塘翠迂人は「講古」の演目を収集し、日本の落語と比較して、「講古」の改良を提言した——(1) 講古者の品性を向上させる。(2) 「講古」の内容（書房先生〔筆者注：私塾の講師〕による創作または内地の落語、講談作品の翻訳）を改善する。彼は「講古」に関して次のように述べた。

（前略）更に廣い意味で考へれば、この講古を通して觀する臺灣人下層民の心理の一端が視知され得ることも出来るので、單に民衆娯樂として扱ふ

には餘り簡であると思ふ。従つてこの滅びんとする講古も改善すれば、或は却つて好果を認知し得るものと信ずる。⁽²⁷⁾

しかし、1936年7月、台湾総督中川健蔵は「民風作興協議会」を開催し、「教化ニ関スル事項」七つを挙げている。そこには「一、敬神思想ノ普及。二、皇室尊崇。三、國語ノ普及常用。四、國防思想ノ涵養。五、國民的訓練。六、宗教竝ニ演劇講古ノ改善。七、隣保扶助ト協力一致。」⁽²⁸⁾とある。翌年末、『台湾日日新報』の記事「紙芝居を普及し 講古を退治 文教局で意氣込む」⁽²⁹⁾は、さらに「講古」の代替品として紙芝居を普及させることを説いている。

芸人によって演じられ、通俗小説を主とする「講古」に対して、「講善書」は知識人によって講演され、その内容も修身講談であり、一種の社会教育とも見なせる。なぜ総督府文教局は紙芝居を用いる一方で、「講善書」は推進しなかったのか。「宗教竝ニ演劇講古ノ改善」という文言から推測すると、当局の目には「講善書」の講壇の様子や説かれる書目が土着的であると映ったのかもしれない。

筆者は前述の塘翠迂人の意見には条理に適っていると思うと同時に、当局の「講古」改良を放棄し、「講古」をそのまま消滅させようとする方針は少々短絡的であると感じる。1941年台湾紙芝居協会成立以前の1930年代に内地（日本本土）から来ていた若干の街頭紙芝居業者による紙芝居を除き、元来台湾での紙芝居は娯楽の機能より、国語教育、社会教育、教化の機能が重視されていた。台湾紙芝居協会が成立された後、作品に台湾語訳を付しても結局国策作品が多数を占めるため、紙芝居はあまり面白くない内地人の表現形式であると台湾人からは見なされがちだった。紙芝居が植民地台湾において、終始主たる娯楽になれなかった原因の一つは、現地文化を軽視するこのような姿勢にあったのではないだろうか。

おわりに

今後の課題が二つある。一つ目は植民地台湾の紙芝居活動者がかかわったラジオ番組「子供の時間」を中

心に、ラジオでの紙芝居活動を考察することである。新垣論文中の資料2：「植民地台湾の各種団体による紙芝居活動年表」は、1940年7月10日台南放送局で賀来猛夫によって放送された『豆上等兵』（賀来猛夫⁽³¹⁾）のみを収録した。しかし、鍾愛『日治時期臺灣廣播節目「子供の時間」初探』によると、ラジオ紙芝居が放送された回数は15回（内訳不明）である。以下に筆者が現在把握している事例を列挙しておく。

- 1933年12月8日台北放送局で島逋家勝丸によって『花咲爺』⁽³³⁾が放送された。
- 1935年11月26日台北放送局で上森大輔によって子供図書館ニュース「紙芝居」のお知らせが放送された。⁽³⁴⁾
- 1937年3月17日台南放送局で山口正明によって『舌切雀』と『かちかち山』⁽³⁵⁾が放送された。
- 1939年4月3日台南放送局で山田健吉によって『原つばの子供達』（西崎大三郎作）が台南のみ放送された。⁽³⁶⁾
- 1939年5月10日台南放送局で山田健吉によって『原つばの子供達』（西崎大三郎作）が放送された。⁽³⁷⁾
- 1939年11月24日台北放送局で川平朝申によって『情に甦る者』（川平朝申作）が放送された。⁽³⁸⁾

二つ目は従来の植民地台湾での紙芝居に関する研究では「講古」、「講善書」への論及が全くなく、本論で「講古を退治」という台湾日日新報の記事を引用して言及したのが初めてである点である。台湾紙芝居の発展の過程で、特に台湾紙芝居協会によって創作された作品は「講古」や「講善書」を意識していたのかどうか。この点について、現存する作品をさらに考察する必要がある。もししていたのであれば、これは皇民化運動中、内地から伝来した芸術の表現形式を「本土化」した重要な試みと見なせる。

植民地台湾の紙芝居に関する研究は、まだ初歩的段階にあるといえる。本論は『新建設』を通し、史料を補足するとともに、次の目標がラジオでの紙芝居活動であるという意見を提起した。そして、紙芝居と「講古」、「講善書」との関係に言及し、現存の作品をさらに考察する必要があるとの観点に至った。

付記

本論の表と引用の部分は原文を尊重し、新旧字体を併用しています。また日本語の表現に関しては前田祥孝さんのサポートを受けました。この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

注

- (1) 新垣夢乃「植民地台湾の紙芝居活動についての記録と記憶——植民地紙芝居研究の射程」、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター「戦時下日本の大衆メディア」研究班『国策紙芝居からみる日本の戦争』勉強出版、2018、354-403頁。
- (2) 上杉允彦「皇民奉公会について（一）植民地台湾における大政翼賛運動」『高千穂論叢』昭和63年度（3）、1989、21-42頁を参照。
- (3) 河原功『『新建設』解題』、『皇民奉公会中央本部刊新建設 別冊』総和社、2005、10頁。
- (4) 注（3）前掲書、5頁。
- (5) 台湾紙芝居協会編『紙芝居の手引』皇民奉公会中央本部、1942、45頁。
- (6) 注（5）前掲書、47頁。
- (7) 第一回は皇民奉公会中央本部編『第二年に於ける皇民奉公運動の実績』皇民奉公会中央本部、1943、76-89頁。第二回は皇民奉公会中央本部編『第三年目に於ける皇民奉公運動の実績』皇民奉公会中央本部、1944、101-107頁。また『台湾日日新報』でもいくつかの新聞記事が見られる。
- (8) 新垣夢乃「山口正明の紙芝居教育について——教育における「感激」の戦中と戦後」『中華日本研究』第9期、2018、33-53頁。
- (9) 「公学校」は台湾人の学童に対する教育機関であり、日本人の学童に対する教育機関は「小学校」である。
- (10) 注（1）前掲論文、357頁。
- (11) 中島利郎編『台湾戯曲・脚本集 四』緑蔭書房、2003、397頁。
- (12) 吉村敏「台湾農村公学校児童の生活に」『台湾教育』1934年12月号、1934、58-64頁。
- (13) 吉村敏「夏を小学生と行く」『台湾教育』1935年10月号、1935、97-102頁。
- (14) 吉村敏「牛」『台湾教育』1937年2月号、1937、71-76頁。
- (15) 皇民奉公会中央本部編『第二年に於ける皇民奉公運動の実績』皇民奉公会中央本部、1943、147頁。
- (16) 邱坤良「戦時在台日本人戯劇家與台湾戯劇——以松居桃樓為例」『戯劇學刊』第12期、2010、7-33頁。
- (17) 簡潔に見れば従来の研究は、日本人を主体とした「芸能文化研究会」により、松居桃樓と竹内治が1943年7月に共同演出した『赤道』、台湾人を主体とした「厚

生演劇研究会」によって1943年9月に上演された『閩雞』などを比較し、日本人演劇人と台湾人演劇人との対立を見いだした。しかし、当時の資料を詳察すると、このような構図はあまりに単純化したものであることが分かる。注（16）前掲論文、20-22頁。

- (18) 「義勇報国隊解説」『新建設』通巻第25号、1944、10頁。
- (19) 「義報隊の活動」『新建設』通巻第26号、1944、46頁。
- (20) 注（5）前掲書、30頁。
- (21) 国立臺灣圖書館臺灣學研究中心「話語留聲——館藏舊籍語言類書展」
<https://www.ntl.edu.tw/public/Attachment/46399163.pdf> (2019年4月8日最終閲覧)
- (22) 與太郎「講古と講善書」『台湾土語叢誌』第6号、1900、97-98頁。
- (23) 注（22）前掲書、98-101頁。
- (24) 田井輝雄「鶏肋集六」『民俗台湾』第22号、1943、25頁。
- (25) 塘翠迂人「台湾講古私考（下ノ一）」『台湾警察協会雑誌』第131号、1928、98頁。
- (26) 中島利郎、林原文子編『『台湾警察協会雑誌』、『台湾警察時報』総目録』緑蔭書房、1998、757頁。
- (27) 塘翠迂人「台湾講古私考（完）」『台湾警察協会雑誌』第133号、1928、114頁。
- (28) 慶古隆夫「台湾の民風作興運動」『台湾時報』第206号、1937、13頁。
- (29) 『台湾日日新報』1937年12月18日5面。
- (30) 山口正明「台湾に育つ紙芝居」『教育紙芝居』2巻10号、1939、7-8頁。
- (31) 『台湾日日新報』1940年7月10日4面。
- (32) 鍾愛『日治時期臺灣廣播節目「子供の時間」初探』国立臺灣大學文學院音樂學研究所碩士論文、2017、134頁。
- (33) 『台湾日日新報』1933年12月8日4面。
- (34) 『台湾日日新報』1935年11月26日4面。
- (35) 『台湾日日新報』1937年3月17日6面。
- (36) 『台湾日日新報』1939年4月3日4面。
- (37) 『台湾日日新報』1939年5月10日4面。
- (38) 『台湾日日新報』1939年11月24日2面。